

さになり、fT4が低値(0.59 ng/dl)、PRL 333.4 ng/mlに上昇。26Wでは更に増大して1/4盲を自覚しPRLは274.4 ng/mlの一方fT4 0.51 ng/dlと低いままであったため、視野狭窄と前葉機能の改善のため直ちにカベルゴリン 0.5 mg/Wを再開。31Wで腫瘍は縮小し、39Wで経膈分娩(男児、BW 3,248g)し、fT4は正常化した。本人の希望から母乳栄養とはせずにカベルゴリンを継続したところ産後10Wで妊娠前と腫瘍はほぼ同じ大きさに戻り、産後12Wで月経が再来した。

microprolactinomaでは休薬しても妊娠中に腫瘍が増大することは稀である一方、macroprolactinomaでは症状が出現することが少なくないことが知られており、妊娠中期にはMRIを撮るべきであり、増大あるいは症候性となれば再開すべきと思われた。

9 “がん治療”と内分泌代謝疾患の“危険な関係”

谷 長行

県立がんセンター新潟病院内科

がん治療に伴い、様々な内分泌代謝異常が引き起こされる。

- 1) 分子標的薬は強い副作用を引き起こさない代わりに、アフィニートールでの高血糖、ステントで甲状腺機能低下症などを引き起こす。
- 2) がん免疫療法として注目を浴びているPD-1 (programmed cell death) 抗体薬で0.3%程度の頻度で劇症を含む1型糖尿病の発症が知られるようになった。当初はmelanoma、2015年12月から非小細胞肺癌に対して保険適応になった他、当院だけでも10本以上の治験が進行中である。当院でも1月27日に肺癌治験中に急激な血糖上昇から劇症化直前状態と思われる症例を経験した。劇症1型糖尿病は多くの腫瘍治療医には知識がなく、また腫瘍治療医と糖尿病医の連携は十分でないため、対象患者に週1回のテストテープによる検尿を提案した。

また、PD-1抗体薬で約15%に甲状腺機能低下症が発症する他、下垂体炎による副腎クリーゼが知られており、当院でも2例経験した。これらの経過観察方法を提案中である。

- 3) 化学療法時に使用されるステロイド剤による血糖悪化に対しては、既に簡便なマニュアルを作成済みである。

10 骨折歴のある2型糖尿病患者について

田村 紀子

万代内科クリニック

【目的】骨折歴のあるDM患者の実態調査を行い、診療上の問題を探る。

症例は2016年3月～5月に当院通院中のDM患者で、骨折についてカルテ調査のできた34人。

【結果】大腿骨近位部骨折は4人で平均年齢84歳、腰椎椎体骨折13人で78.8歳、前腕骨折5人で69.3歳だった。骨折原因は50～60歳台では家事や仕事で脚立からの転落が多く、70歳台以上では自宅内での転倒が多かった。72%に糖尿病性神経障害を認め、61%に網膜症を認めた。骨折を機に骨粗鬆症と診断され治療開始された患者は11人あったが、6人が通院を中断していた。診療連携のあった患者は3人のみだった。

【結語】DM患者に対しては骨粗鬆症の評価を行い、早めに治療開始し骨折を予防することが重要。整形外科と内科の診療連携は治療中断を防ぐためにも必要と思われる。

II. 特別講演

骨粗鬆症と骨軟化症からみる骨代謝

新潟大学大学院医歯学総合研究科

整形外科分野

教授 遠藤 直人